



■主な内容

2009年 第17回 総会・記念講演会報告
 2010 UIFA ソウル大会概要 (暫定)
 第47回海外交流の会のお知らせ「漢城、京城、ソウル、三時代の建築」
 総会記念講演：楨文彦氏「建築における優しさとは何か」
 アジアの台所から
 ソウル清溪川再生譚
 魅力的なりノベーション No.5 ー赤レンガ図書館
 旧朝倉家住宅と代官山ヒルサイドテラスを見学して
 モダニズムと「環境を読む」
 紹介：IAWA (国際女性建築家アーカイブ) のセンターニュース



総会記念講演会会場：日本女子大成瀬記念講堂にて (写真：井出)

2009 Annual Meeting and Commemorative Lecture

2009年 第17回 総会・記念講演会報告

紫陽花が美しい梅雨の晴れ間の一日となった6月20日(土)、UIFA JAPON の第17回総会が開催された。会場は1906年に建設された日本女子大学成瀬記念講堂であった。

松川淳子副会長による開会宣言に続いて小川信子会長は、UIFA JAPON の長期にわたって続いてきた活動が近年さらに活性化してきたこと、更なる会員の協力をお願いしたいと話された。議長は小川会長、書記には安武敦子理事が選出され、出席者32名および委任状提出者20名をもって会員総数85名の過半数を満たし総会は成立した。組織と役員の任務分担に続き、第1号議案の2008年度の活動報告、一般会計収支報告、特別会計収支報告、および監査報告が承認され、引き続き第2号議案の2009年度の活動計画案、一般会計収支予算案、特別会計収支予算案が承認された。2008年度は、活動が非常に活発に行われた。

2009年度もこれまで以上に多くの会員の参加が期待される。議案の詳細は会員各位に送付されている総会資料をご覧ください。



楨文彦氏 (写真：井出)

総会に引き続き、楨文彦氏を講師に招いて記念講演「建築におけるやさしさとは何か」が行われた。講演には300名を上回る幅広い年齢層からの参加者を得た。(P.2 記念講演会関連記事)

その後会場を日本女子大学楓風会館に移し、楨氏を囲んで懇親会が行われ、楨氏に感想や質問が寄せられ、大盛況のうちにプログラ全体が幕を閉じた。(広報 古村伸子)

Overview of UIFA 2010 Conference in Seoul (tentative)

2010 UIFA ソウル大会概要 (暫定)

1. 主題：Green Environment
2. 日時：2010年10月4日(月)～10月13日(水)
3. 大会日程

日時	予定		展示会	ツアー		晚餐
	セッション (午前)	セッション (午後)		午前	午後	
10月4日(月)	受付		受付	<ul style="list-style-type: none"> ・伝統建築ー景福宮、昌徳宮、品慶宮、宗廟、南山、韓屋 ・仁寺洞 ・超高層アパート 		晚餐
10月5日(火)	セッション① (3～4)	セッション② (3～4)	午前 オープン	<ul style="list-style-type: none"> ・親環境アパート ・建国大学敷地の老人福祉施設 ・東大門プラザ 		晚餐
10月6日(水)	セッション③	セッション④	展示会	<ul style="list-style-type: none"> ・清谷川・ソウル大学 ・南山・梨花女子大学 ・板門店・国民大学 ・モデルハウス ・檀国大学敷地 		晚餐
10月7日(木)	セッション⑤	セッション⑥	展示会 午後終了	<ul style="list-style-type: none"> ・国立博物館 ・城北洞 ・北村 		展示晚餐
10月8日(金)	One Day Excursion 大規模近郊都市開発 project (ex. Incheon Songdo) 見学及び symposium			総会		晚餐

4. ポストコングレスツアー日程

日時	ツアー
10月9日(土)	ポストコング レスツアー 全州→南園→智山→慶州→普門観光園地 →安東河回村→東海岸→東草→康陵(観光) →38線(高城)→春川→ソウル
10月10日(日)	
10月11日(月)	
10月12日(火)	
10月13日(水)	

このスケジュールは、7月15日に事務局が入手した2009年7月版の暫定スケジュールです。変更もありうろと思います。待ち望んでいる方も多いと思いますので、とりあえず、お送りしますが、変更も考えられるので、今後も情報が届き次第お知らせしますので、ご注意ください。

なお、KIFAによると、サーキュラーの準備も進んでいるようです。

★第一サーキュラーは、2009年10月に配布予定

★第二サーキュラーは、2010年2月頃配布予定

(総務：松川淳子)

47th International Exchange Lecture "Construction history of Hanseong, Gyeongseong, and Seoul"

■第47回海外交流の会のお知らせ「漢城、京城、ソウル、三時代の建築」■

日時：2009年9月26日(土) 14:00～16:30

講師：富井正憲 (TOMII Masanori) 韓国 Seoul 漢陽大学建築学科教授

会場：神奈川大学 セレストホール (楨文彦氏設計) *東横線「白楽駅」下車 徒歩13分

参加費：会員1,000円 非会員1,500円 学生500円

申込み・問い合わせ：UIFA JAPON 事務局 FAX 03-5275-7866 E-mail uifa@LIQL.co.jp

富井氏には講演に先立ちソウルの最新的话题を解説していただいた (P.3)

Commemorative Lecture by Fumihiko Maki

総会記念講演：槇文彦氏

Sensitivity in Architecture

「建築における優しさとは何か」

新井 今日子 ARAI Kyoko

■ 社会に向き合う優しさ

講演「建築における優しさとは何か」は、静かな中にも、明快なコンテキストに情熱と優しさが溢れ、槇先生と素晴らしい時を過ごせた感動と感謝のひと時だった。建築における優しさとは様々な切り口によって述べる事が出来る。自然も含めた周辺環境への配慮あるたまたまいがひとつ、建築空間が与える良好なスケール感も、建築の素材とマチュールが作り出す身体的反応を呼ぶ感触等、設計する者の人間社会への向きあひ方にも深く関わり合う。

■ レイヤーの重なりの上にさらに奥行感

ヒルサイドテラスで槇先生は、第1～6期まで25年間、それぞれの時代の要望、建物高さの抑制と均整、人を楽しませる周遊性など「優しさの回答」を寄せ続けておられる。住民の街区への思いを「記憶の形象」として継承し、まるでレイヤー上にひとつひとつの記憶が載せられ重ねられ、昔から現在、そして未来へと見通せるような透明感が、ヒルサイドテラスには溢れている。(写真①)

映像性を感じてしまうような詩的で凛とした透明性の先には、奥行感を感じさせるプライベートなパブリック空間があったり、その



① 高さ10mのファサードラインで整えた外観



② 都市の中の1人にやさしい空間



③ 運河を浮遊し背景の印象に沿う



最近作、'07竣工 三原市芸術文化センター

広場を象徴するような樹木があったり、都会のちょっとした隙間に、時間と人の係わり合いを蘇らせるなど、槇先生の「アゴラ=人間活動を受け入れる場」が、figure (バランス感のある形) となって重ねられている。

優しい建築へのアプローチの工夫を次のような言葉で表現された。「どんな敷地でも、外部空間に余裕を持たせ、建物妻側から入り、戸外でのアプローチをできるだけ長くして魅力を持たせ、外から内へのストーリー性のある関係を高めることで、建物の対象が街と一体化する。それが、街のたまたまいに優しさを反映する建物への第一歩。」

■ 青山で、オランダのフローニンゲンの河川でも

都会の中で、ひとり「個」の尊厳を保ちながら、憩いの場が持てるのも都会の建物の優しさなのだとおっしゃる「スパイラル」。(写真②) エントランスから入ると一番奥の光庭に面したカフェ。そこでも槇先生が演出なさる奥行きに引き込まれ、さらに螺旋スロープに巻き取られて行く。

都会から田舎へ川の流れと共に、エスカルゴ、白鳥、雲と変容して行く「フローティングパピリオン」。風景のコンテキストに併せて建築の姿も変わっていく可能性を見せることも、環境に溶け込み同化し、優しい建築。(写真③)

槇先生の作品には、敷地が置かれている環境を読み、時代の要望を読み、それを支える技術をも読み解かれていくその鍵が語られていた。 [写真提供：(株)槇総合計画事務所]

Asian Kitchens
アジアの台所から

宮崎 玲子 MIYAZAKI Reiko

アジアは、北はシベリアから西はスエズ運河までを含む広範囲で地球の陸地の1/3を占めています。北から南まで気候は様々で、食糧をはじめ、火や水の使い方にも差が見られるので、ここでは南部に位置する国々の状態を考えてみたいと思います。地球を北極と赤道の中間辺りで分けた場合、赤道を含む南側では年間の日照時間の差が少なく、また全般に高気温であるため四季を通じて明かりと暖房が不要です。高地の夜間低温には暖房を求めますが、放射、伝導による部分採暖でしのぎます。ちなみに北側では四季の日照時間の差が大きいので、冬季は明かりと低温に対処する暖房を、近代化以前は大量に焚く台所の火で賄っていました。

南の調理の加熱器具は小形で、鍋を加熱する目的のみに火を使います、また高温のため調理した食物は時間と共に細菌汚染にさらされるため、食事の度ごとに調理することによって健康を保ってきました。従って調理頻度が繁くなり、一回の調理時間は短い傾向です。北部の国々では厳しい冬を越すために食物が得られたときは何時の保存に向きました。日本も主婦は食事の度に台所に立ち、炊きたてのご飯と熱い味噌汁に幸せを感じるなかで、保存食のみの食事などあり得ませんでした。このようにして小さい火と短時間調理から、



ラオス北部アカ族台所



2年前に焼き畑をやめて集団移住したラオス北部アカ族の村。かつて屋根は草葺き、壁は編竹であったが、鉄板や人造スレート、板材が使われている。

南では台所で使う燃料が少なく、伝統的な暮らしでは排気による環境汚染の影響は少ないと思います。インドナ半島の北部山地の少数民族の多くは焼き畑農業を行ってききましたが、毎年広大な山林を焼くため禁止政策が取られ、ゴム栽培に転向させられて自然林が失われています。

しかし人々は安易をより好みます。少々古い話ですが、ネパールでは水田への開発が進むなかで、村人は僅かの残った樹木を燃料にするため林は減っていきます。日本の援助で籾殻のタドンを普及させようとしたが、いくら安価にしても現金を出して焚き物を買うより、山から得る無料の薪を選んでしまうようでした。タイでは煙の出る薪より木炭が好まれ、ヒルギの林が木炭の原料として消えていきます。同様にトルコでは黒海沿岸の林が木炭に替わり、これらは緑を失う一種の環境破壊と思われる。

The Cheonggyecheon Restoration Project ソウル清溪川再生譚

富井 正憲 (漢陽大学建築学科教授) TOMII Masanori

2005年に完成したソウル清溪川復元事業は現役の高架道路と川を覆っていた構造物をすべて撤去し、昔の川を復元再生してみせた大プロジェクトとして世界中の話題をさらった。

四周を山で囲まれた風水都市ソウルの盆地の中を西から東に流れる約6kmの清溪川は、その名の通り昔は清い水が流れ、涼しい風が吹き、主婦の洗濯場、子供の遊び場であり、架かっている橋の上では提灯行列等の祭事が催され、庶民に親しまれた川であった。しかし一旦大雨が降ると周囲の山から雨水が大量に流れ込み、氾濫した。韓国の代表的な小説家朴泰遠の『川辺の風景』には1930年代当時の庶民の生活と清溪川の関わりが生き生きと描かれている。

日本植民地時代の後半になると都市人口が増加して川が汚染され、衛生上の配慮から清溪川にふたをする工事が検討されたが、本格的に工事が進捗したのは戦後になってからである。20年をかけてふたの下に上下水道、電気、ガス、通信のライフラインを埋設し、ようやく1978年に幅員50m以上の幅広い道路が生まれた。更にその上にも10年かけてほぼ同時期に4車線、5.8kmの長さの高架道路が完成した。

撤去前の清溪川周辺地域は卸売業や小売店が6万余り密集し、それに500軒ほどの露店が出店するソウルを代表する商業地区であった。上下2つの道路の1日当たりの合計利用車台数は約16万8千台を数えた。こうした気の遠くなるような条件を抱えた地

域になぜ清溪川の復元事業が可能であったかという点、その主因は高架道路の老朽化に関わる補修問題であった。毎年投入される高架道路の維持補修費が莫大であったためである。ソウル市はこれまでの都市づくりコンセプトを改めて、車社会から人間中心へパラダイムシフトして、いっそ高架道路を止めて新しく川を復元した方が、伝統と自然を生かした先見的な都市モデルの提案になり、そこから得られる経済効果も勝ると判断したのである。因みにこの清溪川プロジェクトを推進した当時のソウル市長が現在の李明博大統領その人である。

再生された長さ5.8kmの清溪川には1日17万トンの水が流れ、鳥や魚が泳ぎ、花が咲き、夜のライトアップも美しい。この川の再生で都心の夏の外気温も下がったともいわれる。多くの市民や観光客がこの川辺を訪ね、ソウルの歴史や自然に配慮した新しい都市空間を実体験する。



再生された清溪川ソウル中心部の鳥瞰写真

下流には清溪川文化館が建設され、清溪川600年の歴史と復元事業が詳しく展示されている。清溪川の散歩ついでにぜひ足を運んでいただきたい。

※富井氏にはUIFA韓国大会に向けて講演をお願いしている。(P.1参照)

魅力的なリノベーション No.5 Attractive Renovations No.5 赤レンガ図書館 Akarenga (Red Brick) Library

井出 幸子 IDE Sachiko

赤レンガ図書館と親しまれる赤煉瓦倉庫を再活用した図書館を見学した。昨春オープンした北区立中央図書館で50万冊(開館当初30万冊)の蔵書をもつ図書館である。



北区立中央図書館マーク

■ 立地はかつての軍都

この立地は、1905年から、この王子から十条にかけ広大な陸軍兵器生産供給基地であり、戦後、米軍に接收され、後、陸上自衛隊の駐屯地として今に至る歴史がある。隣接地には古い都営住宅や、自衛隊の宿舎等の集合住宅が取り囲んでいる。かつては20棟ほどの赤煉瓦倉庫があったという。平成に入り次々に解体され、この2連倉庫—旧275号棟(1919年築)—のみが残された。

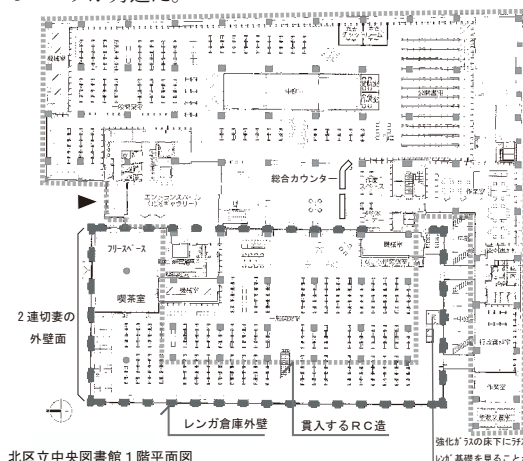
■ 記憶装置として、今・未来への生かし方

その赤煉瓦2連倉庫を、どの様に北区の郷土史、文化史における重要な文化財として「歴史に学び未来を考える場」とするか。生活構造研究所は基本計画において4つの活用計画の提案を行っている。その中の一つに、象徴的な妻面のれんが壁をアプローチゲートとして利用する案、また別案として、構造の柱、梁、外壁を内部吹抜空間に再現する案を提案している。それらの案を佐藤総合計画が設計段階でさらに進め、煉瓦倉庫と、RC建物部分を相互貫入させ、煉瓦倉庫の外壁やラチス柱を図書館の外部から内

部から、見たり、さわったりして親しむ事の出来る空間づくりを行った。関東大震災で耐震性の限界をみた煉瓦造だが、この地で20棟もの煉瓦造が倒壊を免れ平成まで存在し続けてきた事実や、それを支えてきた工法は侮れないものがあり、またその煉瓦造の魅力語るのには次の機会としたい。

■ 今図書館が熱いと云われている

この図書館も熱く、長時間楽しめる滞在支援型、個人研究室やグループ研究室等の学習交流機能の充実、子供図書館を上層に配置し、子連れで気兼ねなく利用できる配置と内容の充実が魅力だ。そして、実際よく利用されている。そのため、総合カウンターの長さが足りないくらい、利用者の列が続いている。喫茶の半分はフリースペースとなっており、食事の持ち込みや、簡単なグループミーティングも可能なスペースとなっている。「赤レンガ図書館」のマークが秀逸だ。



北区立中央図書館1階平面図

近代建築2008.4より

※説明は筆者による

強化ガラスの床下に50kg級の
重量物を置くことが出来る

UIFA JAPON 事務局

〒102-0083

東京都千代田区麹町 2-5-4

第2 押田ビル (株)生活構造研究所内

Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866

E-mail: uifa@LIQL.CO.JP

発行 2009年8月25日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON

c/o LABORATORY FOR INNOVATORS
OF QUANTITY OF LIFE
DAINI-OSHIDA BLDG.
2-5-4, KOUJIMACHI, CHIYODA-KU
TOKYO, JAPAN 〒102-0083PHONE :+81-3-5275-7861
FAX :+81-3-5275-7866

Impressions of the Former Asakura House and Daikanyama Hillside Terrace 旧朝倉家住宅と代官山ヒルサイドテラスを見学して 河原 美津子 KAWAHARA Mitsuko

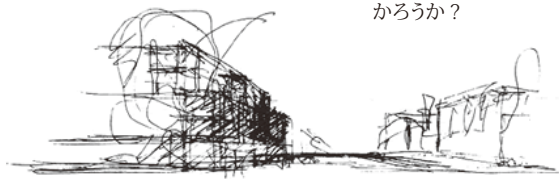
旧朝倉家は、代官山ヒルサイドテラス等の開発主体である朝倉不動産のオーナーの祖父に当たる朝倉虎次郎が大正8年に建設した和風住宅で、その後の関東大震災や太平洋戦争などでの消失を免れ、国の重要文化財に指定されている。主屋は美しい起りのある瓦葺きで、大正ロマンの趣のある室内は、崖線という地形を取り入れた回遊式庭園とともに都心の喧騒を暫し忘れさせるゆとりある空間となっている。

一方、旧山手通り沿いにある代官山ヒルサイドテラスは今年でなんと40周年。1969年以来長い歳月をかけて横文彦氏が育ててこられた複合施設だが、今なお新鮮なメッセージを送り続けている。周遊性のあるヒューマンスケールな空間構成と緑との共存により、豊かで落ち着いた



旧朝倉家住宅

なんとも心地よい風景がそこにはある。上へ上へと伸びていくピクプロジェクばかりがもてはやされている昨今であるが、このような人に優しい街づくりがもう一度見直されても良いのではなかろうか？

代官山ヒルサイドテラス
提供 (株)横総合計画事務所 HILLSIDE TERRACE 89-90

Newsletter of IAWA, International Archive of Women in Architecture

紹介：IAWA(国際女性建築家アーカイブ)のセンターニュース 古村 伸子 KOMURA Nobuko

来年25周年を迎えるIAWAは米国バージニア工科大学内にあり、女性が関わった建築の歴史をドキュメントにし、多様な人々に提供することを目的としています。ニューズレターも下記のURLで読むことができ、毎月興味深い記事を掲載しています。2007年秋号ではモンゴルとブルガリアの女性建築家の紹介記事が掲載されていて、毎月UIFA Japon関連記事も掲載されています。また、収集されてドキュメントになった世界中の女性建築家の貴重な情報はウェブから検索することもできます。

<http://spec.lib.vt.edu/IAWA/news/>

Modernism and Environmental Issues モダニズムと「環境を読む」

田中 厚子 TANAKA Atsuko

建築を設計するという事は、環境を読むことに他ならない。1920年代にヨーロッパで生まれたモダニズムは、合理性に基づいた国際的なスタイルとして、またたく間に世界に広まった。しかし建築家たちは30年代からすでに、国際性や普遍性に疑問を抱き、各地域の風土・伝統・工法を生かした建築を模索してきた。日本の風土に合わせてモダニズムの住宅を設計した土浦亀城も、そのような建築家の一人だ。昨年ようやく『土浦亀城の住宅作品におけるモダニズムの表現と思想』を博論としてまとめたのだが、そこで考えたかったのは、土浦が国際性(モダニズム)と地域性(日本の風土・伝統)をどのように扱ったのかということだった。

一方、この2年ほど「アメリカの名作住宅に暮らす」という連載で、ライト、ノイトラ、シンドラー、ルドルフ、カーン、ムーアなどによる、アメリカの近代住宅16軒を「暮らす・住み継ぐ」という視点から取材した。これもまた、モダニズムが地域に適応した過程を追うものになった。たとえば、ノイトラのロヴェル邸(1929)は、アメリカ初の鉄骨住宅でモダニズムの金字塔だが、敷地や庭との関係を重視したノイトラは、自邸(1933/39)などで内外空間の融合を達成している。シンドラーは、1922年の自邸からずっと内部と外部空間の密接な関係を重視した。またボストン近郊にあるグロビウス自邸(1937)では、ニューイングランドの工法や材料が用いられ、ルドルフは、50年代のフロリダで、亜熱帯の風土に合う住宅を設計している。このように、モダニズムは一枚岩ではなく、その多くが敷地

Burkhardt Residence (Paul Rudolph 1957)
フロリダ州サラソタ沿岸の島にある風通しのよい木造住宅。
床はテラス、壁に地元のブロックを用いている。

や自然と関係を考慮しており、多様だ。ライトが提唱した有機的建築は、モダニズムの対極にあるように思われがちだが、実はさほど違わないのではないかと思う。(拙著『アメリカの名作住宅に暮らす』は、建築資料研究社から10月5日に発行予定)

UIFA Japon Flier and Webpage

UIFA Japonパンフレット委員会・ホームページ準備会がスタートしました

UIFA Japonパンフレットを新しくするための委員会が6月7日から活動しています。7名の委員がパンフレットの考え方、活用方法、盛り込む内容などを検討しています。また、ホームページ準備会も発足し今年の秋の開設をめざしています。

■ 役員会報告

第2回5月21日(2009年) ルーマニア世界大会報告書発送及び今後の販売について報告。記念講演申込状況報告。総会準備について確認。予算書案、名簿等の内容確認。会報第80号企画報告。ホームページ新設の提案。第47回海外交流会、この指とまれ進捗報告。見守りチーム助成金申請について報告、承認。ASWA組活動報告。パンフレット委員会の発足が報告された。

第3回6月12日(2009年) 記念講演資料、議案書の内容チェック、受付等、総会準備について確認。記念講演申込状況報告。会報第79号の発送終了及び第80号以降の進捗状況報告。この指とまれ結果報告。第47回海外交流会の進捗報告。見守りチーム活動報告。ホームページ準備委員会の発足及びパンフレット委員会の活動が報告された。

第4回7月28日(2009年) 総会及び記念講演総括。会報80、81号企画報告。第47~48回海外交流会の進捗報告。見守りチーム活動及び助成決定の報告。ASWA組活動報告。韓国世界大会及びポストコングレスツアーの日程について概要が報告された。

■ 編集後記 ♪祝80号♪

スケール感がよく敷地との幸せな出会い小布施の新図書館 体感(中野)。記憶と技術の消えないうちに、地域の古老から聞く煉瓦の話(須永)。梅雨時はさぼっていた植物の水やりで毎日大汗です(飯田)。暑い日…清溪川を吹きわたる風を想います(在塚)。11年前竣工後、利用者が育てるメタリックチューブの宮城県立図書館を訪問(井出)。日本で女性が国会議員の半数、検事総長になる日はいつなのでしょう(古村)。宮崎さん著書「オールカラー世界台所博物館」台所から環境に合わせた暮らしの歴史が見えて必見です(石川)。災害の多い夏。8月6日、9日、15日がめぐる。NO WAR。持続可能な地球を(渡澄)